

沖代地区条里跡 永添坂本地区
佐知遺跡 加来東遺跡 中津城(VIII)
長者屋敷官衙遺跡

中津市文化財調査報告 第54集

2011

中津市教育委員会

**沖代地区条里跡 永添坂本地区
佐知遺跡 加来東遺跡 中津城(VIII)
長者屋敷官衙遺跡**

中津市文化財調査報告 第54集

2011

中津市教育委員会

例 言

一、本書は大分県中津市教育委員会が 2010 年度に実施した市内遺跡発掘調査事業の調査概報である。

一、調査は 2010 年度国宝重要文化財保存整備事業および 2010 年度大分県文化財保存事業費の補助を受けて実施した。

一、調査主体	中津市教育委員会
調査責任者	北山 一彦 (中津市教育委員会教育長)
調査委員	後藤 宗俊 (別府大学名誉教授) 豊田 寛三 (別府大学学長)
調査員	小林 昭彦 (大分県教育庁文化課参事) 後藤 晃一 (大分県教育庁文化課副主幹)
調査事務	尾家 勝彦 (中津市教育委員会文化振興課長) 田中布由彦 (同 文化財係長) 平田 由美 (同 文化財係)
調査担当	高崎 章子 (同 文化財係) 花崎 徹 (同 文化財係) 浦井 直幸 (同 文化財係)

上記の他高瀬哲郎氏(石垣技術研究機構)よりご指導いただいた。厚く御礼申し上げます。

一、沖代地区条里跡早取地区、永添坂本地区の調査は花崎が、佐知遺跡・中津城二ノ丸地区・おかこい山遺跡の調査は浦井が、加来東遺跡・中津城椎木門横石垣・長者屋敷官衙遺跡の調査は高崎がおこなった。

一、本書の執筆、編集、写真撮影は第1章・第2章・第3章を花崎が、第4章・第6章(1)(2)(4)を浦井が、第5章・第6章(3)・第7章を高崎が担当した。

一、遺構、遺物の実測、製図、拓本などは調査担当者その他、浅田くるみ、穴井美保子、猪立山順子、岩本敏美、金丸孝子、塩谷絹子、佐藤智子、橋内順子、松村たか子がおこなった。

一、現場作業は下記の皆さんの協力による。

阿部恵子 石塔美代子 今永夏樹 小川禮子 金崎ミチ子 川口政代 角美枝子 瀬口礼子
田原文子 広津トシ子 松本浩司 宮津しのぶ 森山勝城

目 次

第1章 地理と歴史的環境	1
第2章 沖代地区条里跡	3
(1) これまでの調査	3
(2) 早取地区	4
第3章 永添坂本地区	5
第4章 佐知遺跡	6
第5章 加来東遺跡	7
第6章 中津城	8
(1) これまでの調査	8
(2) 二ノ丸地区	9
(3) 椎木門横石垣	12
(4) おかこい山遺跡	16
第7章 長者屋敷官衙遺跡	19

第 1 章 地理と歴史的環境



1. 中津城	13. 上ノ原平原遺跡	25. 福島遺跡	37. 草場窯跡	49. 諸田遺跡
2. 中津城下町遺跡	14. 大池南遺跡	26. 福島地下式横穴	38. 躰ヶ迫窯跡	50. 定留貝塚
3. 豊田小学校校庭遺跡	15. 上ノ原稻荷塚遺跡	27. 前田遺跡	39. ホヤ池窯跡	51. 定留遺跡
4. 沖代地区条里跡	16. 清次郎原遺跡	28. 森山遺跡	40. 大谷窯跡	52. 天貝川遺跡
5. 相原廃寺	17. 模遺跡	29. 岩井崎横穴墓群	41. 野依地区条里跡	53. 和間貝塚
6. 三口遺跡	18. 黒水遺跡	30. 犬丸川流域遺跡	42. 野依遺跡	54. 田尻大迫遺跡
7. 相原山首遺跡	19. 大坪遺跡	31. 洞ノ上窯跡	43. 中須遺跡	55. 是則遺跡
8. 鶴市神社裏山古墳	20. 長者屋敷官衙遺跡	32. 安平遺跡	44. 若旗遺跡	56. 全徳遺跡
9. 坂手隈横穴墓群	21. ポウガキ遺跡	33. 城山横穴墓群	45. 十前垣遺跡	57. ガラヌノ遺跡
10. 弊旗邸古墳	22. 大悟法地区条里跡	34. 城山古墳群	46. 野田遺跡	58. 亀山古墳
11. 上ノ原横穴墓群	23. 原遺跡	35. 才木遺跡	47. 上畑成遺跡	59. 石堂池遺跡
12. 勘助野地遺跡	24. 田丸遺跡	36. 城山窯跡	48. 諸田南遺跡	60. 舞手川流域遺跡

第 1 図 中津市内主要遺跡分布図 (S = 1/50,000)

大分県の西北端、中津市は人口8万6千人、市域面積491.09km²を有する。東は宇佐市に、西は福岡県吉富町に南は日田市に、北は周防灘に接する。市域の80%は山林原野が占め、山国川下流で平野が広がる。気候は温暖な瀬戸内気候区に属し、年平均気温は平野部で17.0℃、山間部15.0℃、年間降水量は平野部で1877.5mm、山間部で2456.0mm程である。^(注) 自然景観は耶馬溪が国指定名勝として周知される。ここで中津市内の遺跡を概観してみる。

旧石器時代の遺跡は才木遺跡、諸田南遺跡、大坪遺跡などが挙げられる。諸田南遺跡ではナイフ型石器、尖頭器などが出土している。

縄文時代の遺跡は早期に黒水遺跡が挙げられる。黒水遺跡では陥穴が調査されている。諸田遺跡でも陥穴が直線に等間隔に検出されている。後期になるとボウガキ遺跡、入垣貝塚、高畑遺跡、植野貝塚などが挙げられる。ボウガキ遺跡は集落跡で入垣貝塚とセットでとらえられる。また近年山国町の大勢遺跡から土偶が発掘され話題となった。

弥生時代の遺跡は上万田遺跡、上ノ原平原遺跡、福島遺跡、森山遺跡などが挙げられる。上ノ原平原遺跡では弥生時代前期の貯蔵穴が、福島遺跡では中期の土壙墓、溝、住居跡などが調査されている。森山遺跡は前期から後期の遺跡で標高約59mの丘陵上に集落の全容が明らかとなった。

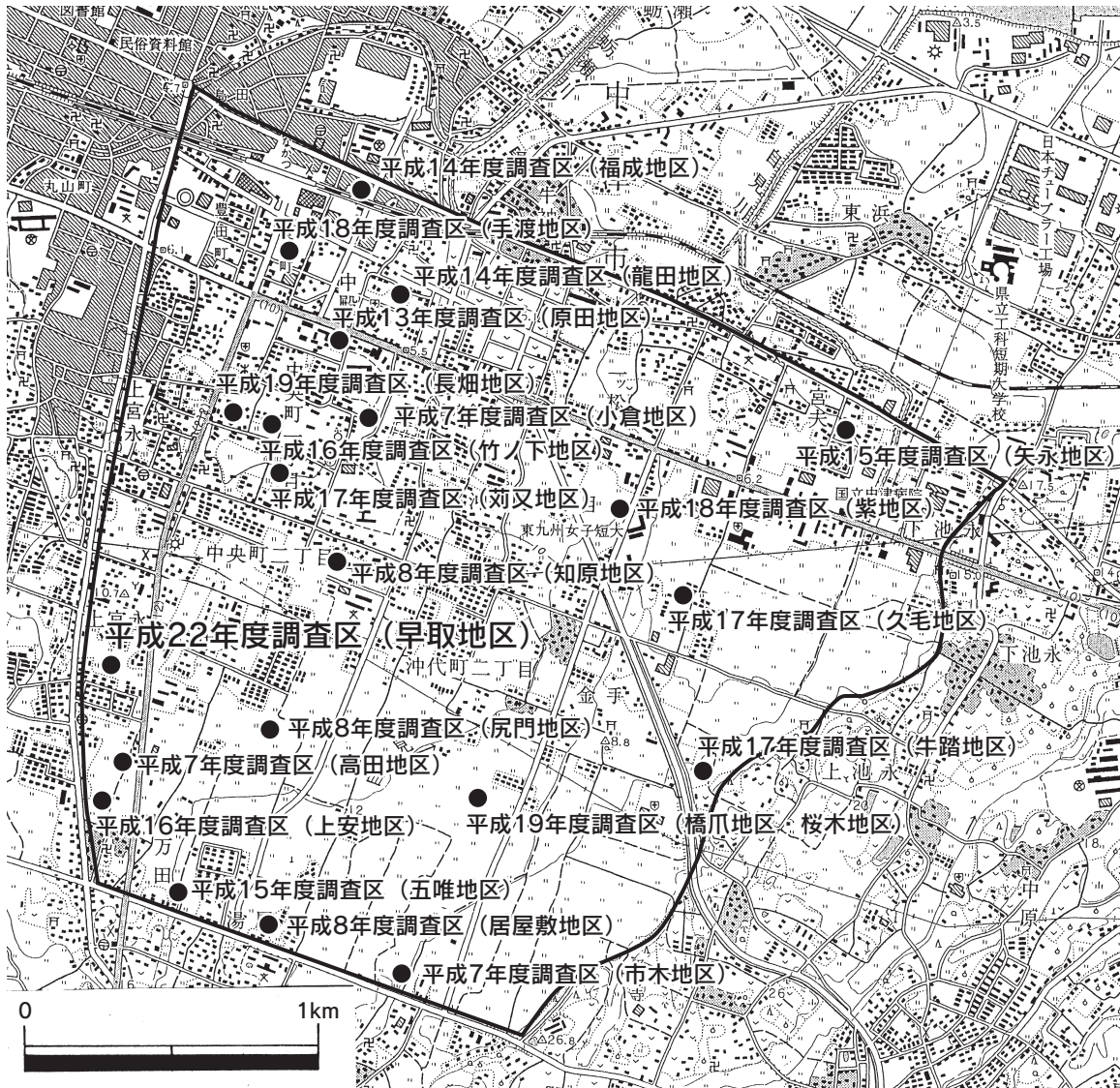
古墳時代の遺跡は高畑遺跡、諸田遺跡、諸田南遺跡、佐知久保畑遺跡、上ノ原横穴墓群、相原山首遺跡、岩井崎横穴墓群、野依伊藤田窯跡群などが挙げられる。高畑遺跡は古墳時代前期の竪穴住居などが調査されている。諸田遺跡、諸田南遺跡では圃場整備に伴う調査で後期の集落跡が検出され、中津市内では初の調査例となったL字形カマドを有する竪穴住居が調査された。墓域は丘陵部に集中する。相原山首遺跡では5世紀の円墳が調査された。大分県指定の史跡である。上ノ原横穴墓群は5世紀後半から7世紀の横穴墓である。野依伊藤田窯跡群は6世紀後半から9世紀にかけ須恵器や須恵質瓦を生産した大分県最大級の窯跡群である。

奈良時代の遺跡は長者屋敷官衙遺跡、沖代地区条里跡、相原廃寺などが挙げられる。長者屋敷官衙遺跡は平成7年市営住宅建替えに伴う発掘調査で発見され、下毛郡の正倉として周知される。また近年、確認調査で礎石建物が検出され国指定史跡に指定された。沖代地区条里跡は現在でもその景観をたどることができる。条里の南端では古代豊前道跡が東は宇佐神宮へ、西は山国川へ直線にのびる。相原廃寺は白鳳系の古代寺院として周知される。

中世の遺跡は前田遺跡、諸田南遺跡などが挙げられる。諸田南遺跡では掘立柱建物や井戸、地下式土壙が調査された。また八並城跡、岩丸城跡、長岩城跡など市内各所に城館が築かれる。長岩城跡は中津市耶馬溪町に位置し石塁や竪堀などが現存し、平成23年3月大分県指定史跡になった。16世紀末、黒田孝高の入部で中津城が築かれる。中津城は近年の調査で築城当初の石垣が広範囲に現存することが確認された。石垣は自然石の特徴を生かして積む技法で、九州に残る最古のものである。1600年、細川忠興が豊前39万石の領主として入国。細川氏は中津城の改修や城下の整備を進め、小笠原氏によって完成される。近世の遺跡は中津城跡、中津城下町遺跡などが挙げられる。中津城下町遺跡では廃棄土坑や御水道などの遺構が調査されている。御水道は城下に上水道を山国川から引き込んだ施設で、類例は熊本県の宇土市や佐賀市などで周知される。

(注1) 平成22年のデータ

第2章 沖代地区条里跡



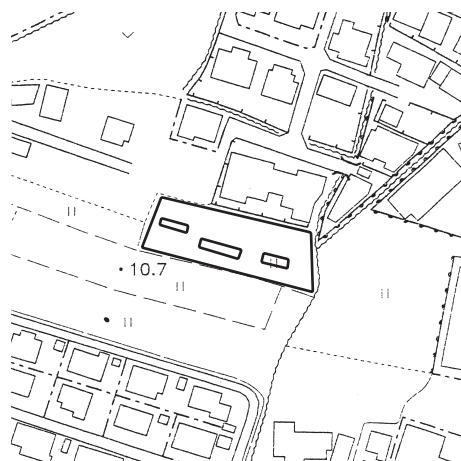
第2図 沖代地区条里跡周辺図 (S = 1/25,000)

(1)これまでの調査

沖代地区条里跡は奈良時代に施行された水田跡で、現在でもその景観をたどることができる。しかし近年の開発で急激にその姿は消えている。中津市教育委員会では開発に伴う発掘調査を実施し記録保存をおこなってきた。これまでの主要な調査を概観する。平成7年度、市木地区では水田に伴う水路が調査された。水路から6世紀後半の須恵器の杯が重なった状態で出土した。水田祭祀をおこなった遺構と考えられる。平成8年度、居屋敷地区では6世紀後半の竪穴住居、平成15年度、五唯地区では掘立柱建物が調査された。平成14年度、龍田地区では時期不明の水田跡が検出された。開発が遺構面まで達しないことから本調査には至らなかったが一部掘り下げ、稲株跡を確認した。平成15年度、五唯地区では12世紀中頃から後半の土坑、平成17年度、刈又地区では景德鎮産小皿小片が出土した。これらの調査結果から条里内の微高地で集落が形成され水田を営んでいたことが確認された。今年度は大字万田字早取で民間開発に伴う確認調査を実施した。



第3図 調査区位置図 (S=1/25,000)



第4図 調査区位置図 (S=1/2,500)

(2) 早取地区

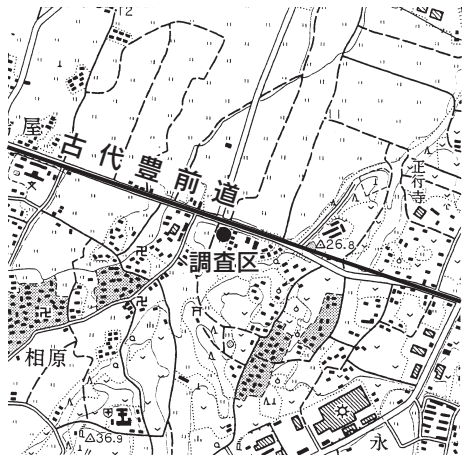
平成22年10月18日、医療法人内尾整形外科医院より中津市大字万田字早取593-2他で高齢者専用賃貸住宅建設に伴う埋蔵文化財の照会がなされた。照会地は沖代地区条里跡として周知されることから確認調査を平成22年10月29日に実施した。

照会地は水田を造成した状態であった。表土から100cmは造成した土層、下層30cmは暗褐色の水田層、下層90cmは暗褐色の粘質土、下層30cmは30cm程の河原石と砂がまじった土層であった。河原石がまじった層は山国側の氾濫によるものと推測される。地山はこれより下層になるが、開発においてこの層より下に影響がないこと、遺構、遺物が検出されないことから確認調査を終了した。



写真1 トレンチ状況

第3章 永添 坂本地区



第5図 調査区位置図 (S=1/25,000)



第6図 調査区位置図 (S=1/2,500)

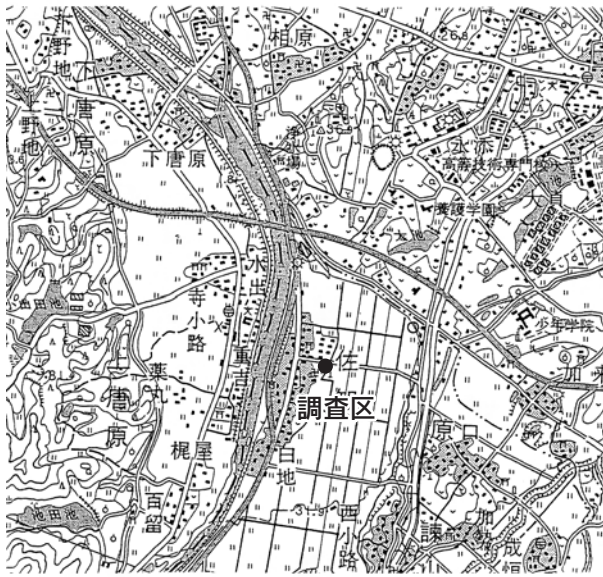
平成22年9月10日、個人より中津市大字永添611番地で集合住宅建設に伴う埋蔵文化財の照会がなされた。照会地は周知の埋蔵文化財包蔵地ではないが沖代地区条里跡の南端に隣接し、古代豊前道跡にも隣接することから試掘調査の実施を決定した。

調査区に2本のトレンチを設定し重機により掘削をおこなった。1本目のトレンチは表土から20cmは暗灰褐色の現耕作土、下層20cmは暗褐色土、下層20cmは黄灰褐色粘質土で地山が確認された。2m×20m掘削したが遺構、遺物とも確認できなかった。2本目のトレンチも土層は同じ状況で2m×4m掘削したが遺構、遺物とも検出されず調査を終了した。

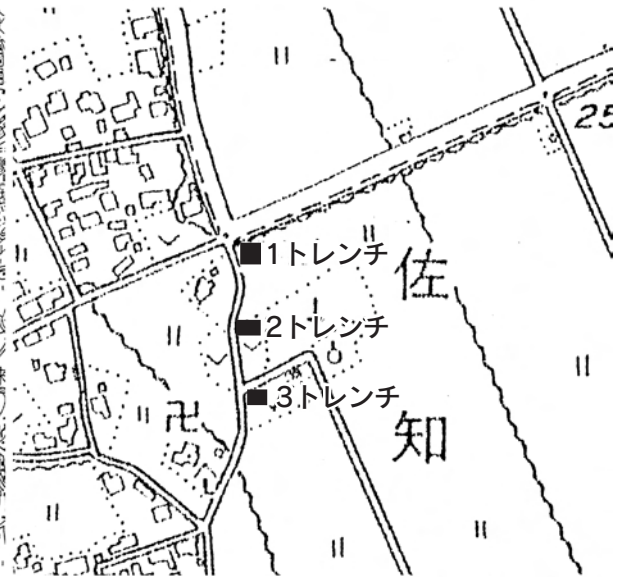


写真2 トレンチ掘削状況

第4章 佐知遺跡



第7図 調査区位置図 (S=1/25,000)



第8図 調査区位置図 (S=1/5,000)

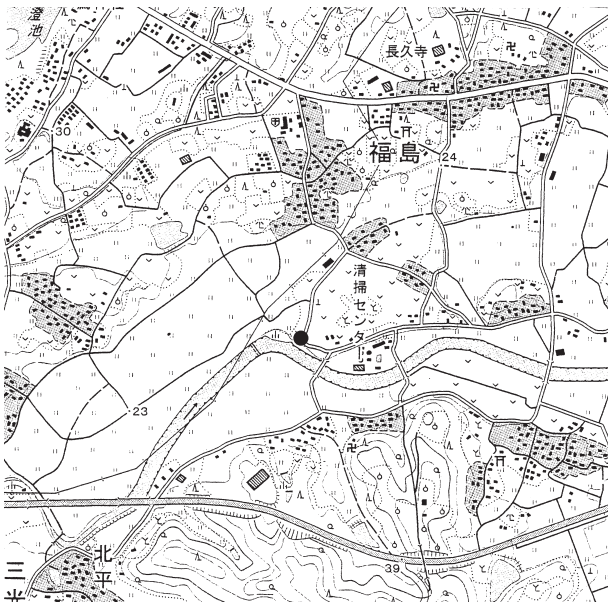
平成22年9月13日、中津市役所三光支所建設課より市教育委員会文化財係へ、中津市三光佐知1019番他地内における市道拡幅に伴う文化財保護法94条第1項の通知文書が提出された。これを受けた同係は平成22年10月1日に確認調査を実施し、遺跡の発見には至らず、調査は同日終了した。

現地は標高23.5mに位置し、圃場整備によって往時の水田区画は既に失われている。各トレンチは、表土を約1.5m除去すると川原石を多量に含む地山に至る。地山に至るまでの各層に遺構・遺物は発見できなかった。地山の状況から、調査地は元来住環境に適さない土地であった可能性も考えられる。

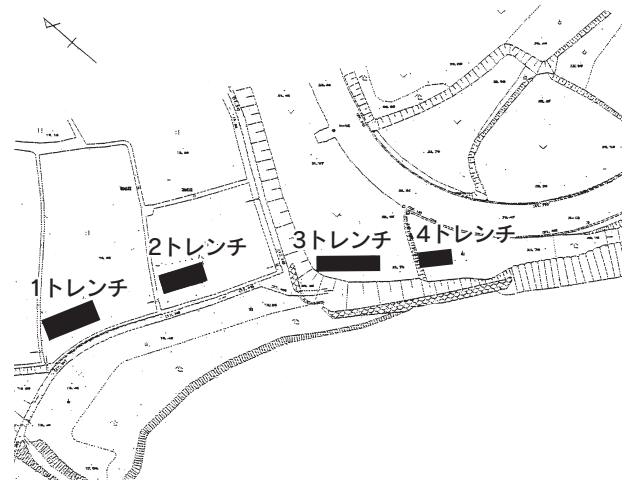


写真3 3トレンチ (東から)

第5章 加来東遺跡



第9図 調査区位置図 (S=1/25,000)



第10図 トレンチ配置置図 (S=1/15,000)

現地は犬丸川沿いの棒垣遺跡（縄文時代の集落）の近接地である。台地上の棒垣遺跡下の川沿いに位置する。市道新設工事に伴い確認調査を行った。重機にて水田部分に二本（第1, 2トレンチ）、畑部分に二本（第3, 4トレンチ）を設定した。

第1, 2トレンチでは、地表面より約90cmで地山面に到達した。地山は灰色のシルト層で、遺構、遺物とも確認できなかった。第3トレンチの地山は、硬い黄褐色の粘性土で、川に向かって傾斜していた。地表面からの深さは、浅いところで40cm、深いところで90cmである。

第4トレンチは、第3トレンチと同様の地山面の上に、近代の盛り土があるのを確認した。地表面からの深さは、浅いところで1.5mであった。いずれも、遺構、遺物とも確認できなかったことから、埋戻し、調査を終了した。



写真4 調査風景

第6章 中津城(VIII)

(1) これまでの調査

中津城本丸・二ノ丸・三ノ丸の発掘調査は、1990年に三ノ丁（三ノ丸跡）のおかこい山で民間開発に伴う発掘調査が、1992年度には二ノ丸跡で確認調査が行われた。本丸跡は、石垣・堀の修復工事に伴い2001年から現在まで確認調査・石垣測量調査が実施されている。調査によって、石垣は安土桃山時代の最も高度な技法を用いて積み上げられていることが判明した。

今年度は、二ノ丸地区で計画された県道拡幅に伴う確認調査、椎木門横石垣の測量、自性寺境内のおかこい山遺跡（県指定史跡中津城おかこい山）の確認調査を行った。

- 2001～2010年度調査区(国庫補助)
- その他調査区
- 堀推定地
- 門跡推定地

第11図 中津城本丸付近地形図(S=1/5,000)



(2) ニノ丸地区

1) 調査にいたる経緯

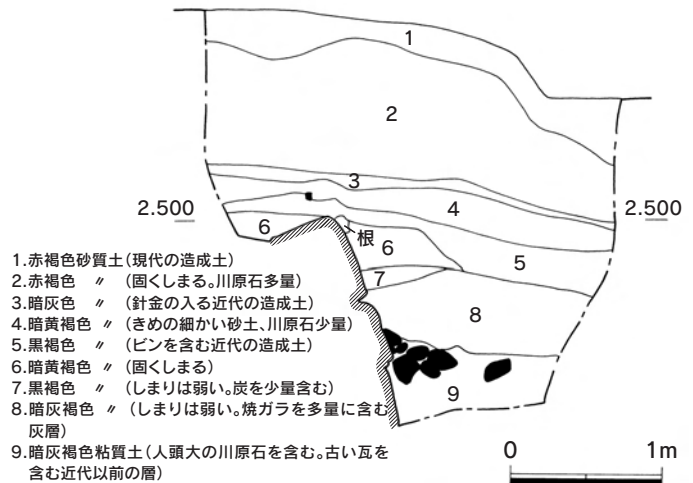
平成22年4月5日、大分県中津土木事務所より市教育委員会文化財係へ県道小祝港線拡幅に伴う文化財保護法94条第1項の通知文書が提出された。工事は、中津北公園側と2009年度に確認調査が行われた竹下義兵衛屋敷跡側へ歩道を設置するものであった。県文化課から依頼を受け、5月24日に工事立会調査を行った。途中、遺構を検出したため5月31日まで確認調査を実施した。

2) 遺構と遺物

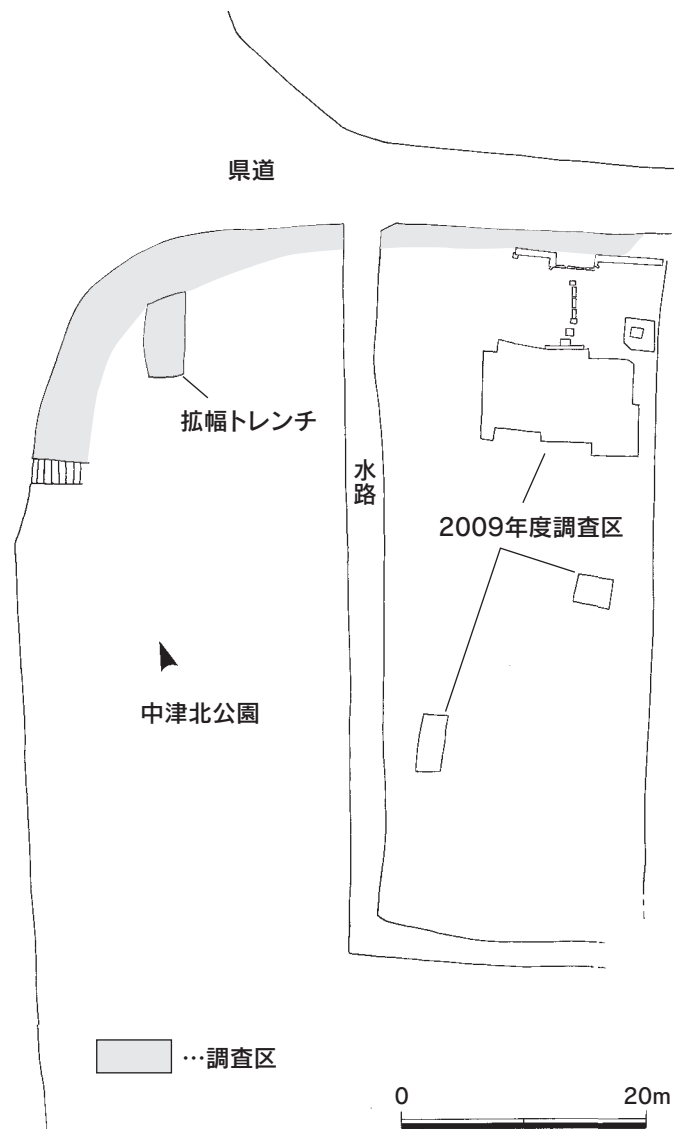
調査の結果、石垣遺構を中津北公園北側で検出した。そこで、トレンチを工事範囲外へ設定し遺構の広がりを確認した。

石垣は長径50～130cm程度の自然石を主体とし、北北東から南南西方向に直線的に認められ東側に面を揃える。調査区外へ延びる状況から両サイドに遺構が存在する可能性が高い。幅6.3mの範囲で確認し、高さは最高所で1.8mを測る。調査区による制限から根石まで掘り下げていない。石垣上部は近代の暗渠敷設工事に伴う石垣の抜き取りが行われている。石垣は布目崩し積みで築かれ、石の長軸を水平方向に置く意識が認められる。大小の石材が使用されており、矢穴のある石も1石存在する。石垣の構築時期は細川氏入部以降であろうか。今後の調査による全容解明が期待される。なお、石垣は今回工事では破壊されないことから、調査終了後埋め戻しを行った。

埋土は第12図に示した層序で、1～8層は近代の整地層である。8層は石炭の燃え滓(焼きガラ)を多量に含んでおり、1992年度のニノ丸跡調査で検出された堀状遺構の下層埋土と同じ状況を呈する。この地区の堀を埋める際に大量の焼きガラを用いたものと推測する。9層は堀の最下層と考えられる粘質

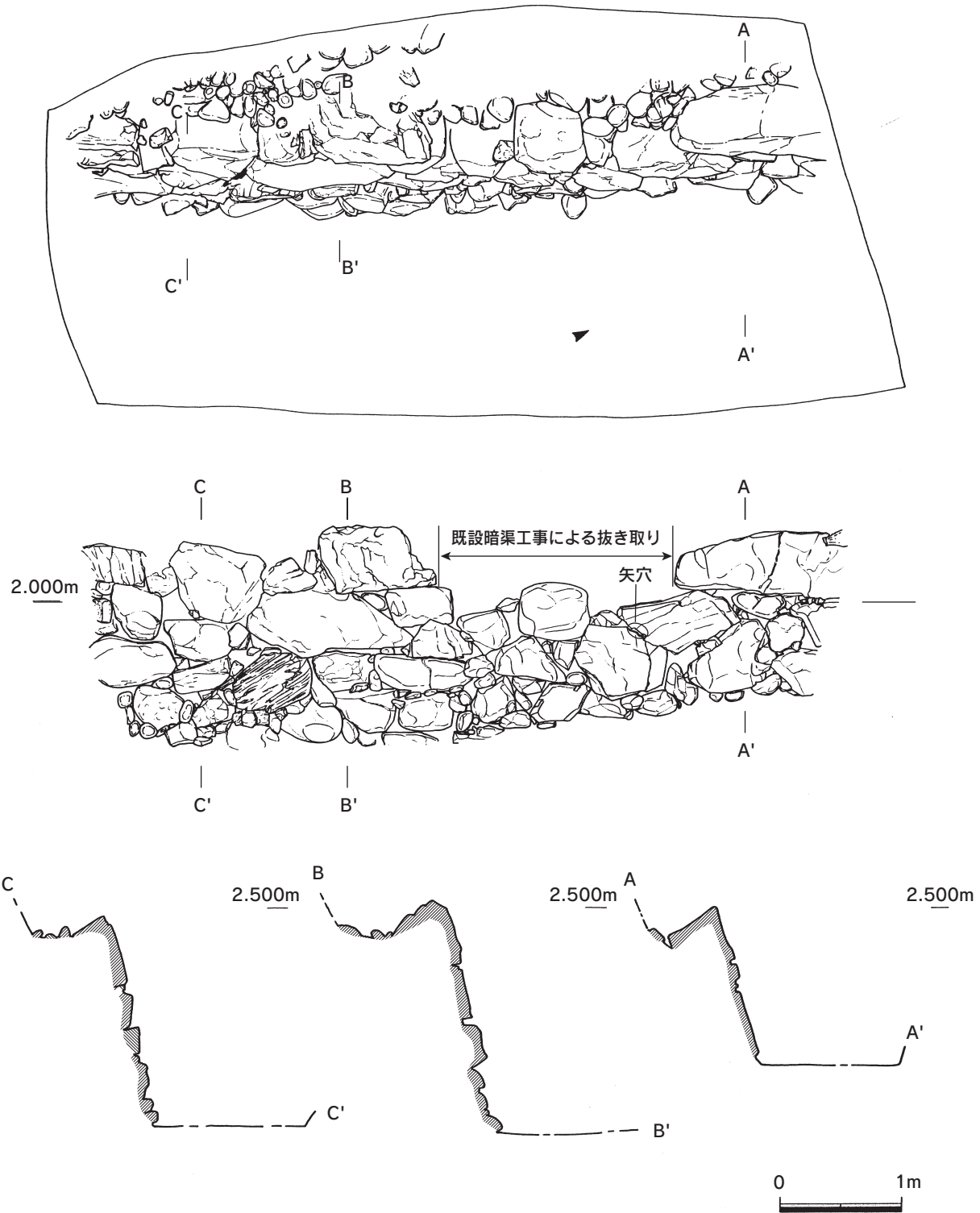


第12図 基本層序(S=1/50)

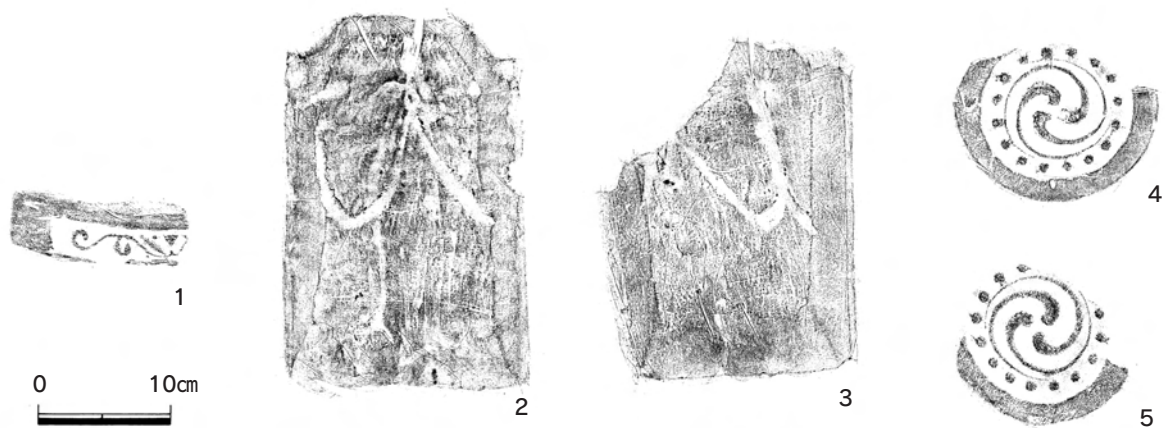


第13図 遺構配置図(S=1/600)

土で、古い時期の瓦を検出した。石垣から東の水路までの埋土については、8層を含む堀を埋め戻す際の整地層が堆積している。この整地層からは「明治三十六年」の墨書銘のある甕か壺の底部片など近代の遺物が多く出土した。堀の幅を石垣から東の水路の東肩までと仮定すると、その幅は約18mとなる。堀幅の確認も今後の調査の課題である。



第14図 平面図・立面図・断面図 (S=1/50)



第 15 図 出土遺物 (S=1/6)

遺物は 9 層から第 15 図の瓦が出土した。1 は軒平瓦の瓦当である。中心の葉が枝分かれし両端に朱紋を配す三葉文である。第一唐草は中心飾の基部から出て、第二唐草は第一唐草に接する。文様帯厚は 2.0cm を測る。中津城 4 類 - C 群に含まれる。2・3 は丸瓦で、内面に布目痕や布袋取紐の痕跡がある。また、コビキの痕跡は、砂粒が横筋状に現れるコビキ B の特徴を有する。2 は長さ 29.8cm、幅 15.4cm、3 は長さ 23.4cm + α 、幅 15.7cm を測る。4・5 は軒丸瓦の瓦当で、三つ巴文である。左回りで珠文は 16 個配される。



写真 5 石垣 (東から)



写真 6 石垣 (東から)

参考文献)

- 中津市教育委員会『中津城跡 (二ノ丸)』中津市文化財調査報告第 12 集 1993
 中津市教育委員会『中津城本丸南西石垣 (IV)』中津市文化財報告第 37 集 2005
 森田克行「屋瓦」『摂津高槻城』高槻市文化財調査報告書第 14 冊 1984

(3) 椎木門横石垣

椎木門は本丸南東隅の門で、大手門→黒門→椎木門を通り本丸内に入る表玄関の門である。現地は椎木門の北側にあたる石垣である。椎木門は現存していない。幕末の絵図によると椎木門を入ると弧を描く石垣が目の前をふさぎ、城内への経路は左へ反転させられる。1663年の押し紙がある庄家絵図には壁のようなものが描かれているが、石垣として描かれているのは1813年の「豊前中津城修築願図」（臼杵市立図書館所蔵）が初見である。

写真10は幕末の様子を描いた日下田家所蔵の絵図（部分）である。弧を描く石垣にあけられた出入口が、p面石垣（写真9、第18図）o面石垣（写真7、第16図）で、o面から椎木門に連続する石垣がN面石垣（写真8、第17図）である。

中津市ではこれまで、石垣の写真測量を行ってきたが、平成22年度までo面とN面石垣の前には公衆トイレがあり測量できずにいた。22年度、トイレが撤去されたことにより、手実測を実施した。

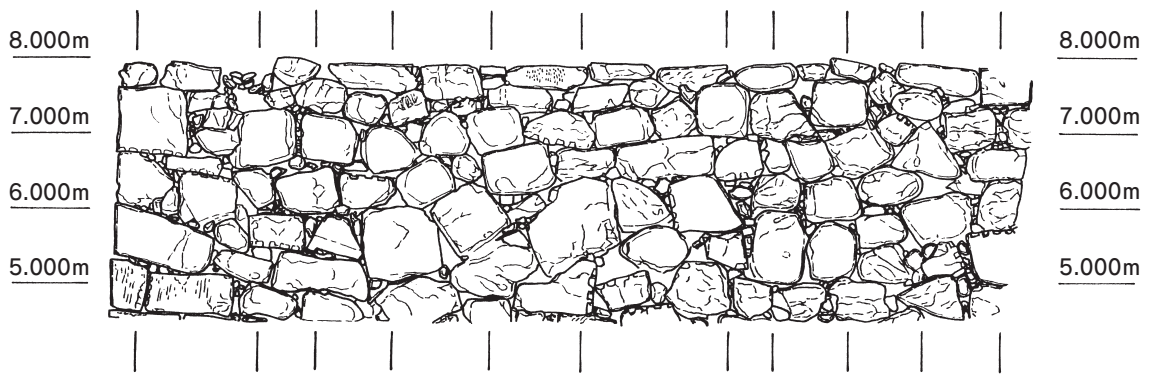
石垣はp面が高さ約3.35m、傾きが85度で、ほぼ垂直に立ち上がる。p面には出入口の扉がとりつけられたであろう痕跡が残る。o面が高さ約3.4mで傾きが83度、N面が高さ約3.3mで、傾きが84度である。p、o、N面には川沿いで多くみられる神籠石が散見される。積み直しの痕跡が明らかで、築城当初のものとは考えにくい。角石に算木積みの意識はあるが、ノミ跡のある石が下方で使われており、現在の形になったのは18世紀代であろうと推定される。



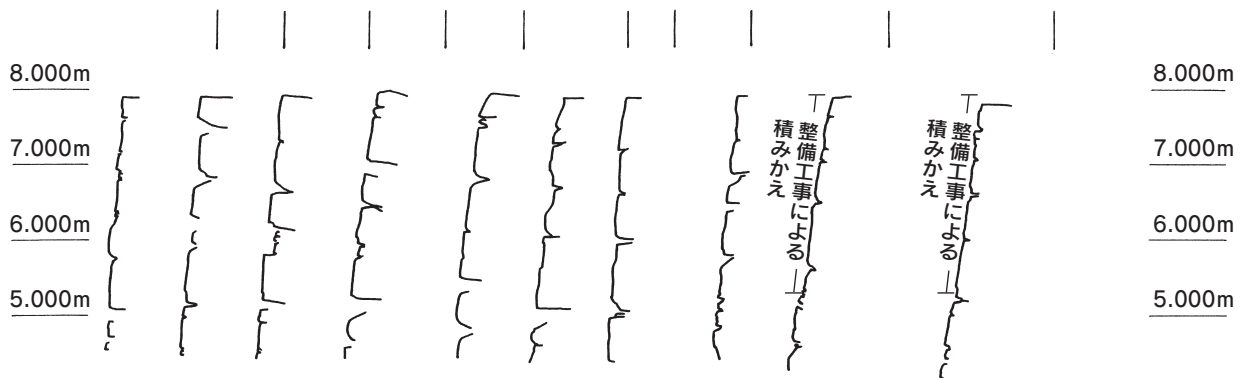
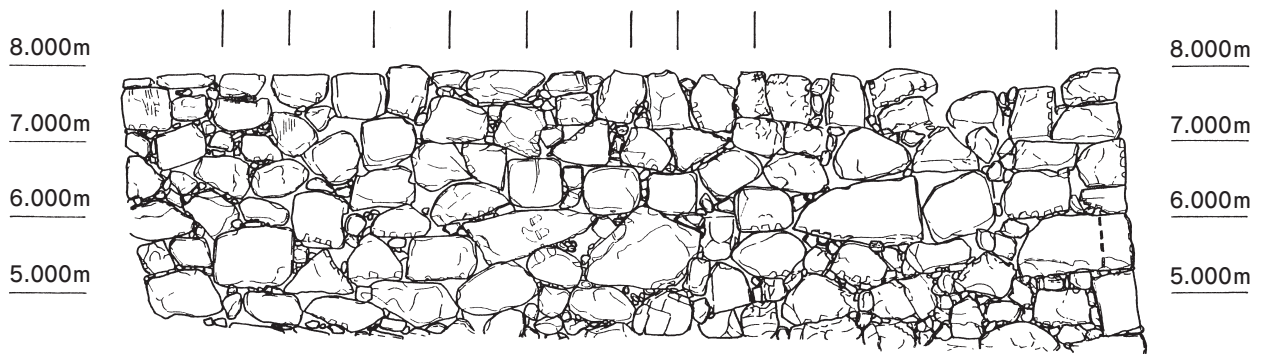
写真7 o面石垣



写真8 N面石垣



第16図 o面 (S=1/100)



第17図 N面 (S=1/100)

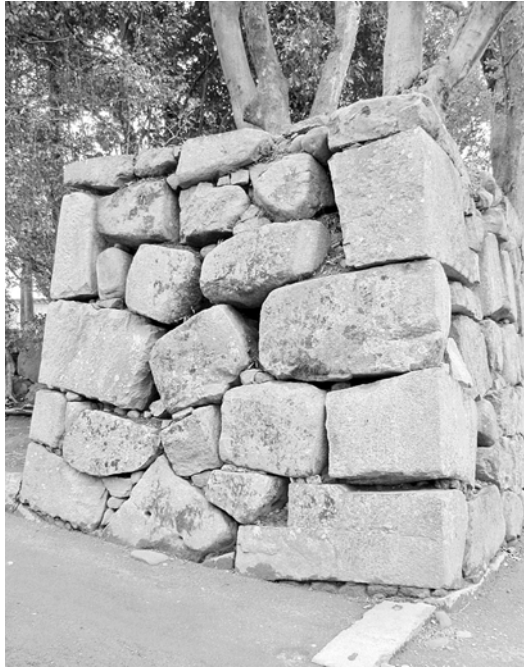


写真 9

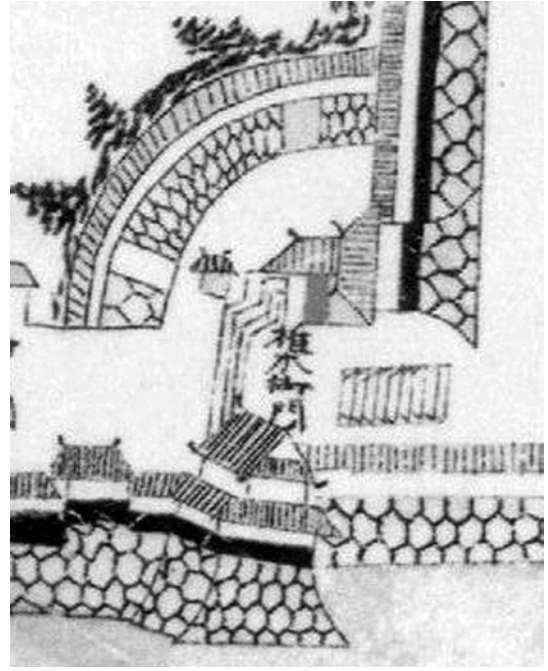
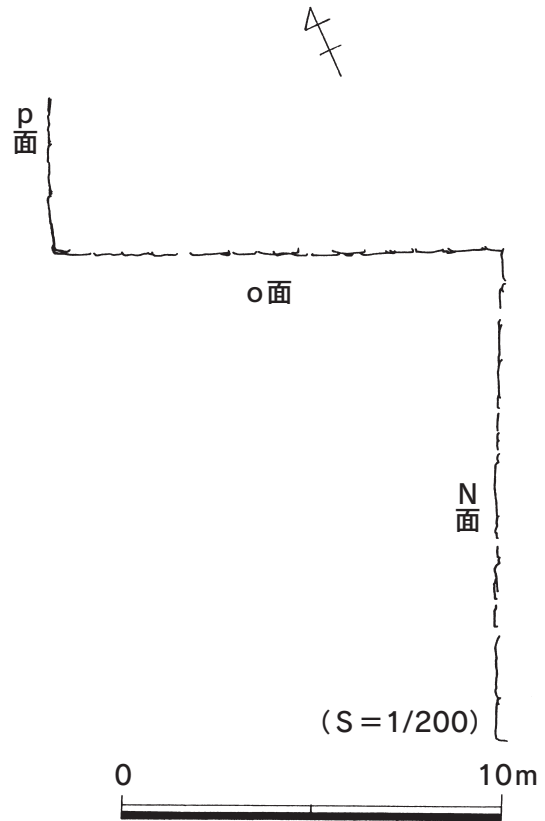
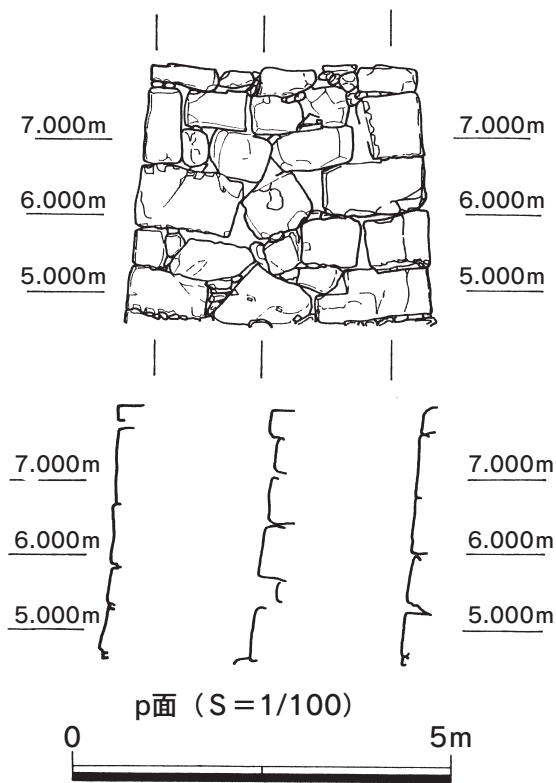
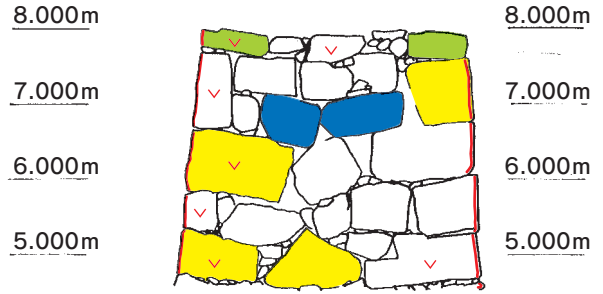


写真 10

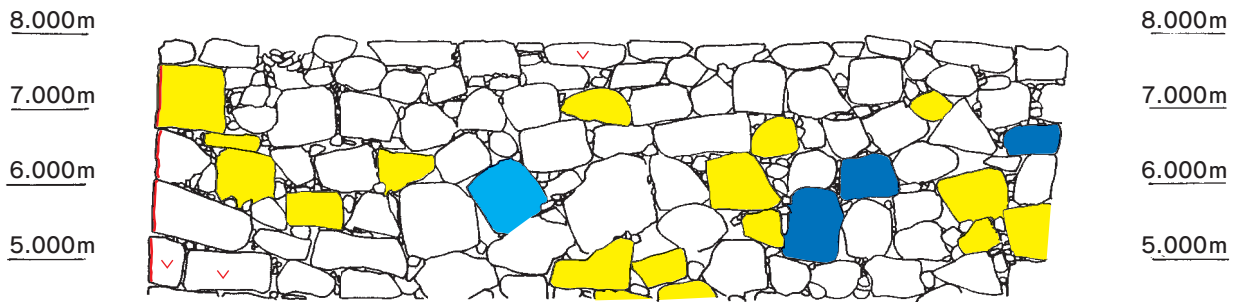


第 18 図

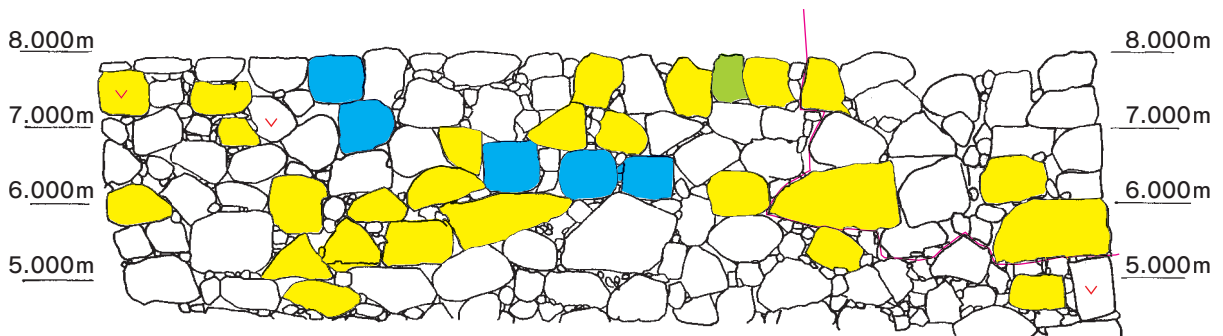
石垣観察図 色見本	
	矢穴
	のみ跡
	L字加工痕
	神籠石か
	加工
	面取り
	解体ライン



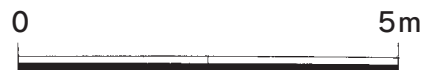
第19図 p面 (S=1/100)



第20図 o面 (S=1/100)



第21図 N面 (S=1/100)



(4) おかこい山遺跡

1) 調査にいたる経緯

中津城は城内・城下を堀や土塁で囲むいわゆる「総構え」の城であった。土塁は「おかこい山」と呼称され、その大半は失われたものの現在5箇所を確認されている。自性寺から金谷口にかけて、三ノ丁の民有地内(2箇所)、寺町の大法寺と本傳寺の境、鷹匠町の市有地に残っている。

今回調査を行ったのは、自性寺境内に所在する外堀跡に面したおかこい山遺跡(以下、自性寺おかこい山)である。自性寺おかこい山の確認調査は2006年度に初めて行われた。等高線測量図の作成とトレンチ調査を主体とした調査の結果、土塁は長さ約120m、頂部幅6m、基底部幅14.4m、高さ5.15mを測り、土塁内部は川原石と土を用いながら築かれていることを確認した。この調査を経て自性寺おかこい山は、2008年度に無指定の段階から県指定史跡に指定された(指定名称:中津城おかこい山)。しかしながら、その間土塁はその形状を保持し続けたわけではなく、2007年度には西側法面中央部で崩落がおき、同年には墓地側(東側)の法面崩落を防ぐための工事が自性寺主体で実施された。2010年度は、西側法面北の2箇所相次いで崩落が発生している。そこで、将来の整備・改修も視野に入れ、土塁西側端部の範囲を把握するための調査を平成23年1月6日～2月2日まで行った。また、2006年度測量未実施範囲についても等高線測量を行った。

2) 遺構と遺物

調査は、西側法面端部に長さ3m、幅2mのトレンチを3箇所設定し行った。その結果、2・3トレンチにて土塁端部を検出した。以下、各トレンチの概要を記す。

1 トレンチ

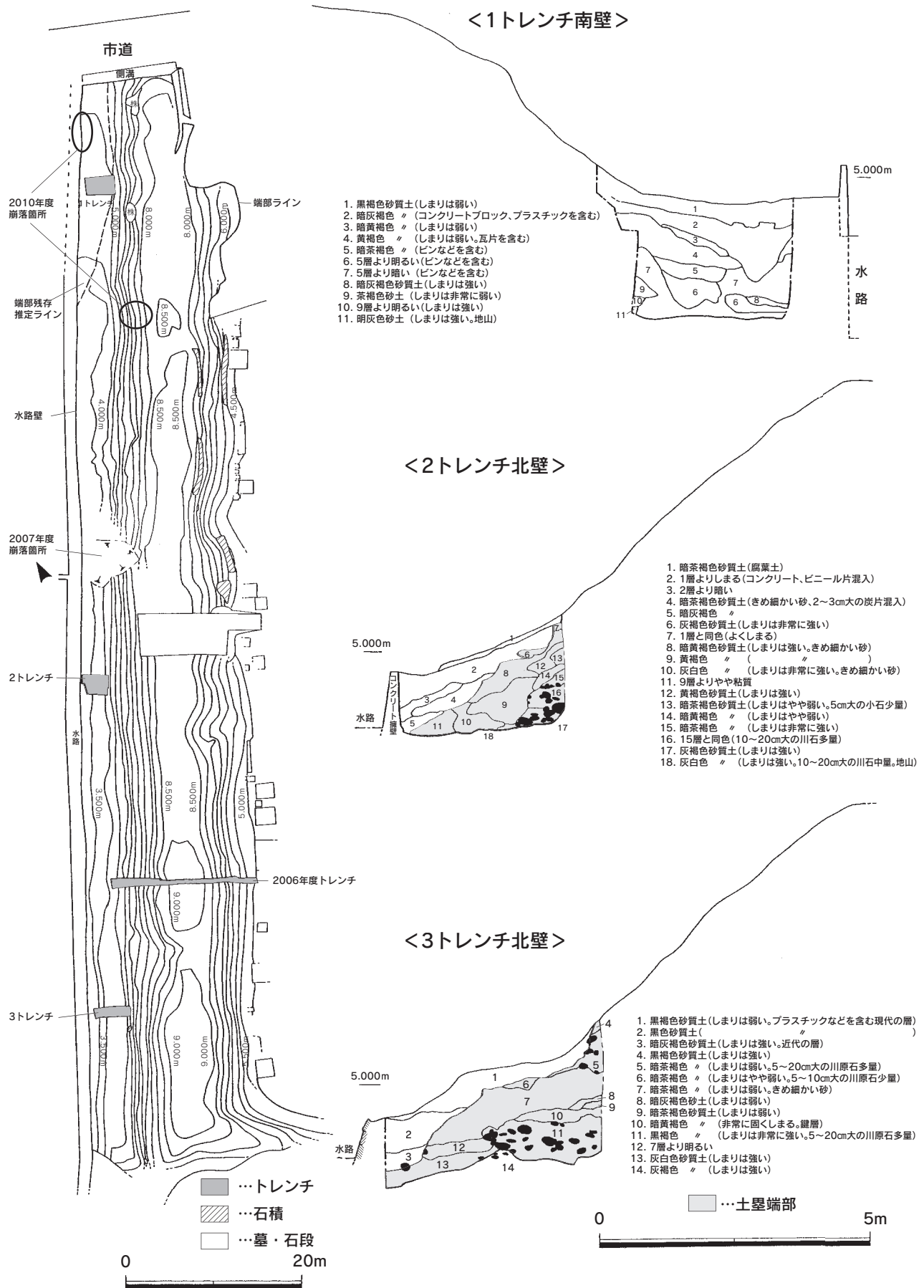
西側法面北に位置する。ここはかつて西側民家の庭として利用されていた所で、西側法面の他の箇所と比して一段高く、かつ平坦面が形成されている。土塁斜面から水路擁壁までの範囲を2m掘り下げたが土塁は検出できず、近代の造成土が地山まで達していることを確認した。よって、周辺は近代に土塁端部を壊しながら地山まで一旦掘り下げられ、その後、客土を用いて現況までかさ上げされたものと推定される。その範囲は1トレンチ周辺の4mと4.5mの等高線が及ばない範囲と考えられる。

2 トレンチ

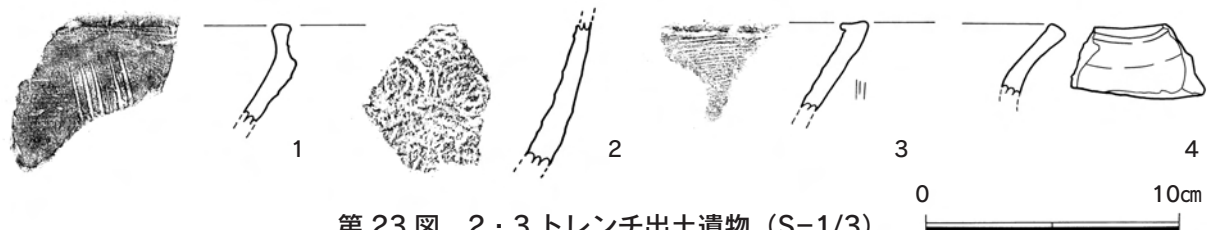
西側法面中央やや南よりに位置する。表土や近代の造成土を除去すると土塁端部に至る。端部は東から西に向けて緩やかに下り、水路擁壁付近にまで達する。擁壁敷設時に上部は掘削されているが、土塁の遺存状態は良好である。構築の前後関係をたどると、まず14～17層を構築している。16・17層は多量の川原石を含み、上部の15層は非常に固くしまる。その後、これらの層を支えるように9～11層を充填し、6～8・12・13層で覆う。1～5層は近代に堆積したもので、2～5層はコンクリート擁壁敷設後に土留めとして一括して持ち込まれた可能性が高い。なお、掘り込み地業の有無は明確にできなかった。



写真 11



第22図 おかこい山遺跡平面図 (S=1/600)・断面図 (S=1/100)



第23図 2・3トレンチ出土遺物 (S=1/3)

3 トレンチ

西側法面南よりに位置する。土塁上部は、水路擁壁敷設に伴い掘削された可能性が高い。構築順序については、まず10・11層を築き、それを支えるように12・13層を構築している。その後、6～9層を盛り、さらに4・5層を積み上げている。1～3層は近現代の所産である。なお、掘り込み地業の有無は明確にできていない。

遺物は第23図1～4が出土した。1は2トレンチ出土の一括資料で、瓦質土器の挿鉢である。口縁端部は逆「く」の字状に曲がり、屈曲部の張り出しは強い。色調は暗灰色を呈する。15世紀代の資料。2～4は3トレンチ出土で、2は5層出土の須恵器の胴部片である。内面に同心円当て具痕が残る。3・4は瓦質土器で8層出土。3は鉢か。内面に横方向ハケ目が残る、外面はわずかに縦方向工具痕が残る。色調は赤褐色を呈する。4は鉢もしくは挿鉢の口縁部で、注ぎ口の部位にあたる。灰色を呈する。いずれの資料も、土塁成立の時期を明確にするものではないが、付近に各時期の遺構が存在したことを示唆するものである。

3) まとめ

今回の調査によって、西側法面の土塁端部は1トレンチ付近を除き、上部が水路敷設時に一部掘削されているものの水路擁壁付近まで遺存していることが想定できた。これにより、2006年度トレンチ西側の土塁端部も水路擁壁まで達することが予想されるため、自性寺おかこい山の基底部幅は最大で約19.2mとなる。また、2009年度に測量調査を実施したテニスコート付近から金谷口まで延びるおかこい山の規模は、長さ128m、頂部幅6m、基底部幅15.6m + α 、高さ2.59m ~ 4m + α を測る。自性寺おかこい山とほぼ同規模で巡っていたものと考えられる。

次に、今回検出した土塁の構築方法について触れてみたい。2・3トレンチでは、はじめに川原石を含む固い層を形成し、それを支えるように土を充填していること、そしてそれらの上部に土を盛る点で共通している。また、3トレンチではその上に川原石を含む層を再び盛っている。下の川原石の層との間隔は約1mを測る。この状況は2006年度の調査において、土塁頂部で川原石の層が1mの間隔を空けて検出された状況に似る。このことから、土塁内部は、厚さは不明ながら上下に約1mの間隔で川原石の層が水平にレベルをあわせて存在するものと推定される。その数は8層前後であろうか。今後、類例との比較・検討を通して実態の解明に努めたい。

参考文献)

小柳和宏「宇佐高村と中世雑記考」大分県地方史研究会 1995

中津市教育委員会『中津城 (VI)』中津市文化財調査報告第42集 2007

第7章 長者屋敷官衙遺跡

長者屋敷官衙遺跡は古代下毛郡衙正倉と推定される遺跡である。平成7年、中津市大字永添の市営住宅建て替えに伴う調査で発見された。以前から大量の炭化米の出土が確認されている場所で、掘立柱建物、礎石建物あわせて14棟の大型建物が検出された。平成22年2月22日、国指定史跡に指定された。

これまでの調査では、建物群は溝に区画された約90m×120mの範囲で確認されている。過去その周辺からも炭化米が出土しており、平成12年には建物群の西側を調査し、同時期の土こうを検出した。建物群の西側、南側でも溝を確認しており、さらなる広がりが予想されている。

国指定範囲は遺跡推定地全体の中の北西部にあたる。平成22年度は、国指定範囲内でまだ未確認であった北側部分を調査した。調査は重機による掘削で、当初3本のトレンチを予定していたが、西端部分でトレンチ掘りを行った場合、台地下周辺の民家に影響がでるおそれがあったことからトレンチ2本を掘削するにとどめた。

第17トレンチは東側に東西方向に設定した約3m×14.6mのトレンチで、地表面から約65cmの深さで地山に到達した。確認できた遺構は小さなピット多数と、L字型に屈曲する幅約45cmの溝、その溝を切る大きな掘りこみである。大きな掘りこみは他の調査区でも検出した中世「八並城」の堀の一部と思われる。L字型の溝は幅が建物群を囲む方形の溝と同じであることと、方角も同じであることから、官衙遺跡関係の遺構であることも考えられる。

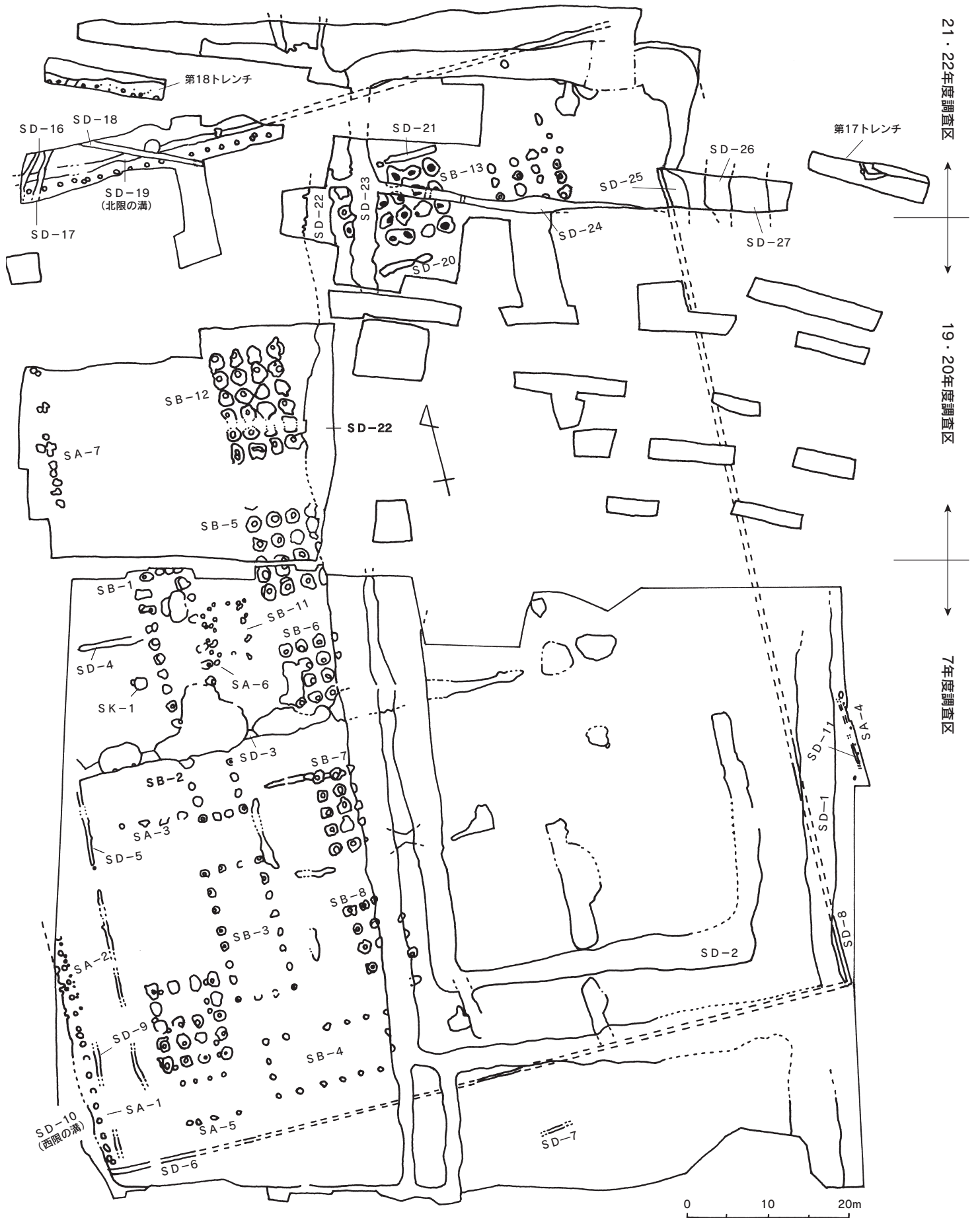
第18トレンチは17トレンチの西側に東西方向に設定した約2.6m×14.5m、深さ約70cmのトレンチで、多数のピットと幅約1.1mの溝一本と、その溝を切る大きな掘りこみを確認した。大きな掘りこみは第17トレンチ同様、中世「八並城」の堀と思われる。幅約1.1mの溝は過去の調査で確認したSD-17の続きであろうか。

いずれの遺構も表面での確認のみであったため、時期・性格の決定にはいたらなかった。

国指定地内の確認調査は今回でいったん終了させる。今後は史跡整備にむけての資料を得るための指定地外を中心とした範囲確認調査を行う。



写真12 調査前風景



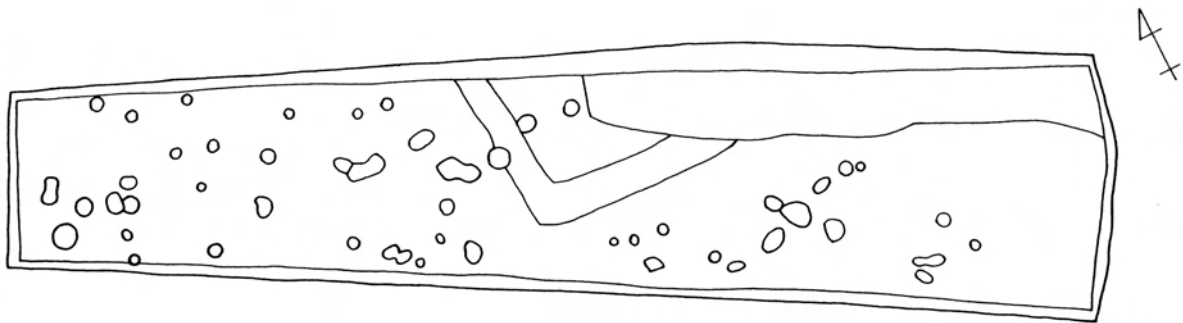
第24図 長者屋敷官衙遺跡全図 (S=1/600)



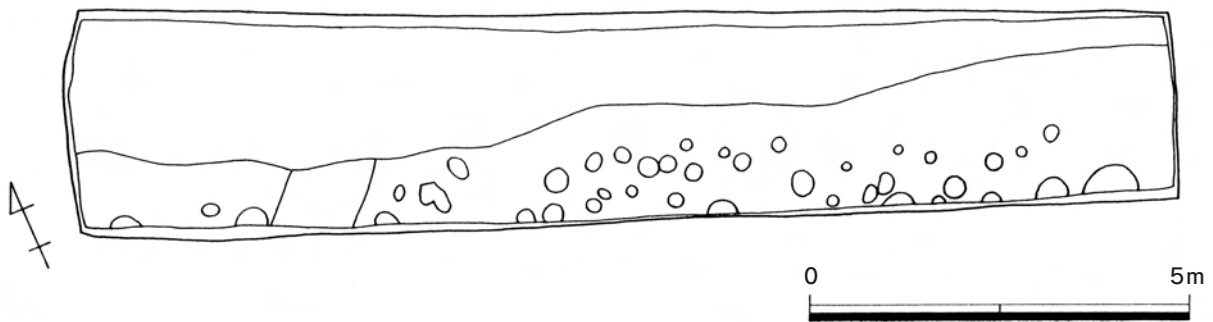
写真 13 第 17 トレンチ



写真 14 第 18 トレンチ



第 25 図 第 17 トレンチ (S=1/100)



第 26 図 第 18 トレンチ (S=1/100)

報 告 書 抄 録

書 名	沖代地区条里跡早取地区 永添坂本地区 佐知遺跡 加来東遺跡 中津城 (Ⅷ) 長者屋敷官衙遺跡							
副 書 名	2010 年度市内遺跡発掘調査概報							
巻 次	4							
シ リ ー ズ 名	中津市文化財調査報告 第 54 集							
編 集 者 名	高崎章子・花崎 徹・浦井直幸							
編 集 機 関	中津市教育委員会							
所 在 地	〒 871 - 8501 大分県中津市豊田町 14 番地 3 TEL 0979 - 22 - 1111							
発 行 年 月 日	2011 年 3 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
おきだい ちく じょうり あと 沖代地区条里跡 はやどり ちく 早取地区	なかつ し おおあぎ まんだ 中津市大字万田 593-2 他	44203	203007	33° 34′ 11″	131° 12′ 2″	20101029	40 m ²	高齢者専用 集合住宅建設
ながそえ さかもと ちく 永添坂本地区	なかつ し おおあぎ ながそえ 中津市大字永添 611	44203	なし	33° 34′ 50″	131° 11′ 14″	20101015	48 m ²	集合住宅建設
さ ち い せき 佐知遺跡	なかつ し さんこう さち 中津市三光佐知 1019-1 他	44203	203152	33° 35′ 16″	131° 11′ 25″	20101001	20 m ²	市道拡幅
か く り せき 加来東遺跡	なかつ し おおあぎ ふくしま 中津市大字福島 897-1 他	44203	203149	33° 33′ 10″	131° 13′ 42″	20101026	142.5m ²	市道拡幅
なかつ じょう に の まる 中津城二ノ丸	なかつ し ひめじ まち 中津市 1235-2 (姫路町)	44203	203001	33° 35′ 16″	131° 11′ 25″	20100524 ～ 20100831	30 m ²	県道拡幅
なかつ じょう しい の きちん 中津城椎ノ木門 よこいしがき 横石垣	なかつ し 中津市 1278-1 他	44203	203001	33° 36′ 10″	131° 11′ 16″	20101101 ～ 20110228	100.9m ²	保存整備
なかつ じょう 中津城 おかこい山	なかつ し ほん ち 中津市 1904 番地 1	44203	203003	33° 35′ 59″	131° 10′ 55″	20110106 ～ 20110202	20 m ²	範囲確認
ちやうじや やしきかん が い せき 長者屋敷官衙遺跡	なかつ し おおあぎ ながそえ 中津市大字永添 2303-3 他	44203	203119	33° 34′ 6″	131° 12′ 21″	20101201 ～ 20110331	85.5m ²	範囲確認
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
沖代地区条里跡 早取地区	なし	なし	なし	なし	なし			
永添坂本地区	なし	なし	なし	なし	なし			
佐知遺跡	なし	なし	なし	なし	なし			
加来東遺跡	なし	なし	なし	なし	なし			
中津城二ノ丸	近世城郭	江 戸	石 垣	瓦	近代に埋没した石垣を検出した。			
中津城椎ノ木門 横石垣	近世城郭	江 戸	石 垣	なし	なし			
中津城 おかこい山	近世城郭	江 戸	土 塁	須恵器 瓦質土器	土塁端部が水路擁壁まで達している ことを確認した。			
長者屋敷官衙遺跡	官衙・城跡	古代・中世	ピット・堀	なし	なし			

**沖代地区条里跡 永添坂本地区 佐知遺跡
加来東遺跡 中津城 (VIII)
長者屋敷官衙遺跡**

2010年度 市内遺跡発掘調査概報4
中津市文化財調査報告 第54集

2011年3月31日

発行 中津市教育委員会
印刷 高橋印刷所